



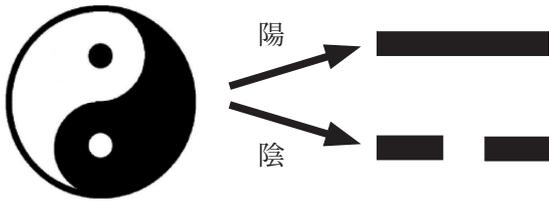
第1章

入式歌解

六壬神課金口訣は、古代三式の大六壬・奇門遁甲・太乙神数を融合させた紀元前4世紀ごろの孫臏の作といわれる。上巻の最初にある入式歌解は、立課の方法と五行の組み合わせによる大象の判断方法が記載されている。立課は慣れれば1分もかからない。初心者でも表を見ながら5分程度とても簡単である。そして面白いように当たる。もし万が一立課を間違えたとしても、その課で判断した結果は正しい。周易の再筮すれば穢れるという思想とは異なり、同じ問題を何度占ってもよい。また的中率は非常に高く干支の奥義を究めれば、まさに神になったようなものである。

1 節 陰陽五行と干支

陰陽は、太極が最初に分かれて生じたものである。陽は軽く澄んで天となり、陰は重く濁って地となる。陰陽の基本的な性質を表にする。



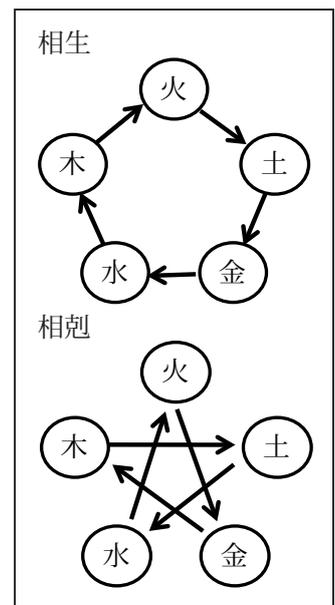
陽	天	男	君子	夫	明	昼	速	剛	強	重	積極
陰	地	女	臣下	妻	暗	夜	遅	柔	弱	軽	消極

五行に関する古い記述は、中国春秋戦国時代の「尚書」洪範に「1に水・潤下、2に火・炎上、3に木・曲直、4に金・従革、5に土・稼穡」とある。図にすると次のようになり、四季春夏秋冬に対応する。



【五行の相生】

- 木生火 木は燃えて火になる。火の勢いが強くなれば木は滅してしまう。
- 火生土 物が燃えると灰（土）になり土に還る。
- 土生金 鉱物は土の中にあり、土を掘ることで得られる。
- 金生水 金属の表面には水滴が貯まる。
- 水生木 木は水によって成長する。水がないと枯れる。



【五行の相剋】

- 木剋土 木は土の栄養を吸収し土を痩せさせる。
- 火剋金 火は金属を溶かす。金属は火によって製錬される。
- 土剋水 土は水を濁らせる。土によって水は流れを変える。
- 金剋木 金属製の鋸や斧で木を傷つけ切り倒す。木は切り倒されて製材になる。
- 水剋火 水は火を消す。

【比和】

同じもの同士の五行を比和という。木と木、火と火、土と土、金と金、水と水。

【反剋】

- 木剋土のとき、土が強いと木は根を張ることができない。土剋木が起こる。これを土侮木と呼ぶ。
- 火剋金のとき、金が強いと火は金を溶かすことができない。金剋火が起こる。これを金侮火と呼ぶ。
- 土剋水のとき、水が強いと土は水を制御できない。水剋土が起こる。これを水侮土と呼ぶ。
- 金剋木のとき、木が強いと金は木を切り倒すことができない。木剋金が起こる。これを木侮金と呼ぶ。
- 水剋火のとき、火が強いと水は火を消すことができない。火剋水が起こる。これを火侮水と呼ぶ。

【五行の意味】

五行の基本的な意味は、次のようになる。

	四季	方位	色	味	五常	天候	病気	地理	五音
木	春	東	青	酸っぱい	仁	風	肝臓・胆嚢	林野	角
火	夏	南	赤	苦い	礼	晴れ	心臓・小腸	高山	徵
土	土用	中央	黄	甘い	信	曇り	脾臓・胃	平地	宮
金	秋	西	白	辛い	義	雷	肺臓・大腸	道路	商
水	冬	北	黒	塩辛い	智	雨	腎臓・膀胱	河川	羽

【清過ぎる五行】

木が清いと植物は芽を出さない。火が清いと食べ物は煮えない。土が清いと草木は生じない。金が清いと器にならない。水が清いと魚は住まない。

人の性格も同じであまりにも清くては、かえって偏屈な人間になる。また、清い人間はすぐに傷がつく。陰陽が中和する中庸の道が良い状態である。

【四季による旺相休囚死】

四季によって五行の旺相休囚死が決まる。旺相は強く、休囚死は弱い。

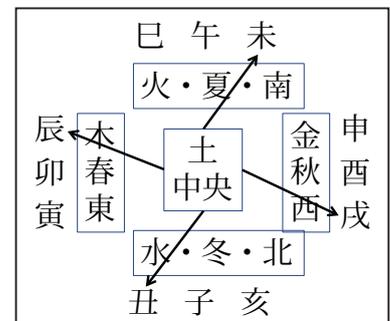
	旺	相	休	囚	死
春	木	火	水	金	土
夏	火	土	木	水	金
秋	金	水	土	火	木
冬	水	木	金	土	火
土用	土	金	火	木	水

土用は丑辰未戌月の最後の18日間

【十二支と陰陽五行】

十二支は、子丑寅卯辰巳午未申酉戌亥で陰陽五行は表のように対応している。また、春夏秋冬の図にすると右のようになる。土は本来中央に属するが、土用として丑辰未戌月の終わりの18日間に配当される。

番	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
支	子	丑	寅	卯	辰	巳	午	未	申	酉	戌	亥
陰陽	陽	陰	陽	陰	陽	陰	陽	陰	陽	陰	陽	陰
五行	水	土	木	木	土	火	火	土	金	金	土	水
旧月	十一	十二	正月	二	三	四	五	六	七	八	九	十
節気	大雪	小寒	立春	啓蟄	清明	立夏	芒種	小暑	立秋	白露	寒露	立冬



旧月は漢数字で記載、各月は二十四節季の節入りから始まる。たとえば、新暦では1月は1日から始まるが、旧月では十二月の丑月となり小寒の1月5日ごろから始まる。本来の意味とは異なるが新暦1月を丑月と呼んでいる。月の十二支である月支を月建と呼ぶ。年支は太歳、日支は日建とも日辰とも呼ぶ。

(注) 金口訣は節入りが月の始まりとなるが、大六壬は中気が月の始まりとなる。

十二支は時間も表す。表の通りである。1日は24時間なので1つの十二支は2時間を現す。1日の始まりは午前0時ではなく、前日の23時とする。つまり23時の子刻がその日の始まりである。日本の占い界では午前0時を日の始まりにする流派が多いので注意が必要である。

時支	子	丑	寅	卯	辰	巳	午	未	申	酉	戌	亥
時間	23～01	01～03	03～05	05～07	07～09	09～11	11～13	13～15	15～17	17～19	19～21	21～23

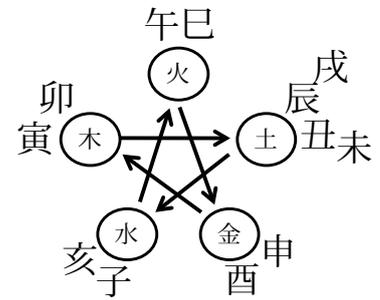
時空（四柱）の始まりをまとめておこう。

	始まり	備考
年	立春2月4日頃より	寅月を正月とする。卯月は二月。
月	節入りより	各節入りの4日から8日ごろになる。
日	子刻23時より	真太陽時にするために時差と均時差の修正が必要。
時	奇数時より	

注：漢数字を使う

陽が陽または陰が陰を剋するときを無情といい、その剋は激しい。剋する方を七殺と呼ぶ。陽が陰または陰が陽を剋するときを有情といい、制御のような意味になる。

たとえば、寅剋辰は無情であるが、寅剋丑は有情である。注意点は、このとき特殊な関係が成立する場合である。たとえば、申剋寅は無情であるが、寅申の関係は相沖となってお互いが大きく傷つく。また、申剋卯は有情であるが、卯申の関係は絶となってしまう断交の状態となる。

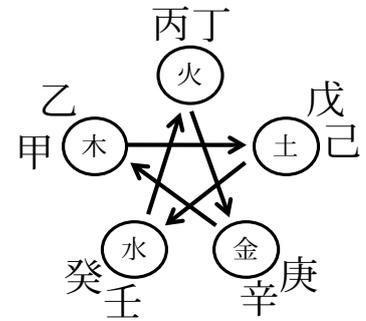


【十干と陰陽五行】

十干は、甲乙丙丁戊己辛壬癸で陰陽五行は表のように対応している。

番	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
干	甲	乙	丙	丁	戊	己	庚	辛	壬	癸
陰陽	陽	陰	陽	陰	陽	陰	陽	陰	陽	陰
五行	木	木	火	火	土	土	金	金	水	水

それぞれの十干から七番目の十干を七殺と呼ぶ。たとえば、甲の七殺は庚、丁の七殺は癸である。陽と陽または陰と陰の剋であるから無情であり、激しい剋なので殺と呼ぶ。



四柱推命では、日干の七殺を単に殺と呼び、偏通星では偏官となる。

【十干と十二支の自然的な解釈】

- | | |
|-------------------------|-----------------------------|
| 子は、万物を地下で育む状態。 | 甲は、草木の種、土中であって未だ芽を出さない状態。 |
| 丑は、寒気が解けるのを土中で待つ状態。 | 乙は、初春土中より芽を出した苗の状態。 |
| 寅は、万物復活して活動を始める状態。 | 丙は、芽を伸ばし成長を開始した苗の状態。 |
| 卯は、草木土を破って芽を出す状態。 | 丁は、枝葉を伸ばし旺盛に成長した状態。 |
| 辰は、万物振るい動く状態。 | 戊は、花が咲き乱れる百花繚乱な状態。 |
| 巳は、万物成長し大地に満つる状態。 | 己は、それぞれの花独自の芳香を発する状態。 |
| 午は、陽気が満ち、陰気動き始める状態。 | 庚は、開花も終わりに近づき、受精完了の状態。 |
| 未は、果実となり、それぞれの味わいを出す状態。 | 辛は、種や果実が結実し、それぞれに独自の味がある状態。 |
| 申は、陽気が衰となり、万物呻吟する状態。 | 壬は、種が地面に落ち、次の年を待つ状態。 |
| 酉は、万物が成熟して豊かに実っている状態。 | 癸は、じっと待機して萌芽の準備をする状態。 |
| 戌は、陽気消失、万物ことごとく滅する状態。 | |
| 亥は、陰気盛んとなり万物地下にこもる状態。 | |

【十二支と体】

十二支	子丑	寅亥	卯戌	辰酉	巳申	午未
部位	脚	膝	尻	両腕	両肩	頭

【十干と体】

十干	甲	乙	丙	丁	戊	己	庚	辛	壬	癸
部位	頭	首	肩	胸	腹	下腹	腰	肋骨	股	手足
臓器	胆嚢	肝臓	小腸	心臓	胃	脾臓	大腸	肺臓	膀胱	腎臓

【干支と数】

(1) 五行数

水土は1、5、7 木金は3、6、9 火は2、4、8

(2) 干支数

甲己子午は9 乙庚丑未は8 丙辛寅申は7 丁壬卯酉は6 戊癸辰戌は5 巳亥は4 (十干無)

【六十干支】

十干と十二支を組み合わせると次の表のように六十干支ができる。

旬											空亡	四大空亡
1	1 甲子	2 乙丑	3 丙寅	4 丁卯	5 戊辰	6 己巳	7 庚午	8 辛未	9 壬申	10 癸酉	戌亥	水
2	11 甲戌	12 乙亥	13 丙子	14 丁丑	15 戊寅	16 己卯	17 庚辰	18 辛巳	19 壬午	20 癸未	申酉	なし
3	21 甲申	22 乙酉	23 丙戌	24 丁亥	25 戊子	26 己丑	27 庚寅	28 辛卯	29 壬辰	30 癸巳	午未	金
4	31 甲午	32 乙未	33 丙申	34 丁酉	35 戊戌	36 己亥	37 庚子	38 辛丑	39 壬寅	40 癸卯	辰巳	水
5	41 甲辰	42 乙巳	43 丙午	44 丁未	45 戊申	46 己酉	47 庚戌	48 辛亥	49 壬子	50 癸丑	寅卯	なし
6	51 甲寅	52 乙卯	53 丙辰	54 丁巳	55 戊午	56 己未	57 庚申	58 辛酉	59 壬戌	60 癸亥	子丑	金

【旬中空亡と四大空亡】

十干と十二支を組み合わせると十二支が2つ余る、これを旬中空亡という。また、各旬の納音を見ると不足している五行を四大空亡という。たとえば、第1旬の甲子旬納音は、海中金、炉中火、大林木、路傍土、劍鋒金で水がない。四大空亡が水るときは、壬癸亥子が空亡になる。空亡は「吉は吉ならず、凶は凶ならず」である。天冲殺や大殺界は、この空亡のことであるから何事も成り難いが単純に凶と判断してはいけない。

【十干の納支】

十干は十二支に変換することができる。十二支は十干に転換することはできない、四柱推命で用いる蔵干は別の話である。規則は陰陽五行をそのまま変換する。今まで戊と己の納支は、はっきり分類できていなかったが、下記表のように分けるのが真理である。

十干	甲	乙	丙	丁	戊	己	戊	己	庚	辛	壬	癸
十二支	寅	卯	午	巳	戌	未	辰	丑	申	酉	子	亥
	甲子、甲戌、甲申 旬の納支					甲午、甲辰、甲寅 旬の納支						

たとえば、戊子は甲申旬（甲申・乙酉・丙戌・丁亥・戊子）なので戊を納支すると戌になる。また、己亥は甲午旬（甲午・乙未・丙申・丁酉・戊戌・己亥）なので己を納支すると丑になる。

2節 立課

立課は、次の6手順による。

- ①地分の十二支を決める
- ②占うときの時空（四柱）を求める
- ③将神になる十二支を求める
- ④貴神になる十二支を求める
- ⑤人元になる十干を求める
- ⑥神干と将干を求める

例題として、平成24年4月15日20時を干支暦に直すと、壬辰年、甲辰月、丙午日、戊戌時となる。これが占うときの時空である。相談を受けたとき、一番最初に地分未を取ると、将神午、貴神午、人元乙そして神干甲と将干甲が求まり立課できる。人元、貴神、将神、地分を四位といい、神干、将干を含めて課という。金口訣は時空と課を合わせて吉凶判断を下す。また相談者の生年月日の四柱を使うこともある。

壬辰	甲辰	丙午	戊戌
		空亡	寅卯
人元	乙		
貴神	甲午		
将神	甲午		
地分	未		

①地分を取る

何か相談を受けたら一番最初に地分になる十二支を決める。地分を取るには、相談を受けた瞬時の時空が大切である。地分は相談者が来た方位または座っている方位で取る。たとえば、東京で占う場合に京都から電話で相談があったとすれば、京都は東京から見て西方位なので地分を酉にする。正確な地図を見る必要は特にない。

注意点としては、外国など遠い場所からの相談で方位を球面三角法で求めるのは間違っている。球面三角法では一番肝心の太陽が昇る方位、沈む方位である東西が考慮できていない。遠い場所からの相談には、方位で地分を取らないほうがよい。

球面三角法とは、ブラジルが日本の西になる手法である。高度な数学を使えば正しい方位が求まると考えた結果生まれたのだろうが方位の根本が無視されている。

次に実際の方位がわからない場合、相談者が占い師の前に座っていたら地分を午に取る。これは正しい方位ではなく占い師の前を午、後ろを子、右側を酉、左側を卯として十二支を配置する。「君子南面する」と言われるように占い師自身を太極にして方位を決める。

米老師の有名な談話に、道を歩いていると右側から友人に話かけられた。『今度の試験の合否はどうでしょう？』米老師が彼の方を向くとタイガーバームの看板が目に入った。『不合格です』米老師にとって右側は酉でありタイガーバームは寅なので、十二支の寅酉の関係は絶となるからである。絶つまり不合格となる。

また、好きな数字を言ってもらい、開いた本のページ数を用いる、相談内容を書いた文字数、携帯の番号や住所表示など数字を12で割った余りを使う。割り切れた場合の地分は亥とする。たとえば、本を開いて147ページだとすれば、147を12で割って余りは3なので、地分は寅になる。147を $1+4+7=12$ としてはいけない。

人生で重要な出来事、就職、結婚、緊急手術などは本人の干支を使ってもよい。昭和27年生れは辰年なので地分を辰にする。

十二支の順番と12で割ったときの余り数表

番(余り)	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12(0)
十二支	子	丑	寅	卯	辰	巳	午	未	申	酉	戌	亥

②占うときの時空（四柱）を求める

時空は市販の暦があればすぐに求まる。暦で年柱・月柱・日柱のそれぞれの干支は求まるが、時柱は別表で求める必要がある。

たとえば、平成24年10月18日午後4時15分東京で占ったとすれば、時空は次のようになる。

壬辰年 庚戌月 壬子日 戊申時

注意することは、1日の始まりは0時ではなく、前日の23時である。日本の占いのように0時を日替わりにして子を23時から0時までの遅い子と0時から1時までの早い子に分けない。また、日と時には時差と均時差の修正を行う。干支暦は真太陽時を使う。東京であれば時差は+19分であるが、均時差は月日によって変わるので一覧表が必要となる。時差は東経1度の違いにつき4分ずれる。兵庫県明石の東経135度が日本標準時なので、ここより東側は時差をプラスし西側はマイナスにする。上記の例では、東京大手町は東経139度45分なので時差の修正は、 $(139.75 - 135) \times 4 = 19$ となり19分となる。さらに、地球が太陽の周りを楕円軌道を描いていることや傾いていることにより生じる均時差を求めなくてははいけない。均時差は毎年大きな違いはないので次の均時差表を用いて求める。均時差を表より求めて15分。したがって、実際は34分加えて、午後4時49分として時干支を求めている。もし占う時刻が午後4時26分だったら申時ではなく、ちょうど午後5時となって酉時になってしまう。

年と月の干支を求めるときは、修正は不要である。年と月の干支は地球の公転問題であって自転問題ではないからである。年柱と月柱の始まりに用いる節入り時刻は世界同時である。

あと、修正としてサマータイムの修正が必要な場合がある。日本でも戦後数年サマータイムを使っていた時期があった。その時間に生まれた人は修正が必要となる。また外国は多くの国がサマータイムを導入している。

時差と均時差の修正が終わったら、まず次の表(1)から時間を時支の十二支に直す。そして表(2)を使って日干と時支より時干を求めればよい。この表(2)を五子元遁表という。人元、神干、将干はこの表を用いる。先の例では、壬子の申時なので(2)表より時干が戊と求まる。

(1) 時間を十二支に直す

十二支	月	節	時間
子	12	大雪から	23～1
丑	1	小寒から	1～3
寅	2	立春から	3～5
卯	3	啓蟄から	5～7
辰	4	清明から	7～9
巳	5	立夏から	9～11
午	6	芒種から	11～13
未	7	小暑から	13～15
申	8	立秋から	15～17
酉	9	白露から	17～19
戌	10	寒露から	19～21
亥	11	立冬から	21～23

(2) 日干と時支から時干を求める（五子元遁表）

	子	丑	寅	卯	辰	巳	午	未	申	酉	戌	亥
甲己日	甲	乙	丙	丁	戊	己	庚	辛	壬	癸	甲	乙
乙庚日	丙	丁	戊	己	庚	辛	壬	癸	甲	乙	丙	丁
丙辛日	戊	己	庚	辛	壬	癸	甲	乙	丙	丁	戊	己
丁壬日	庚	辛	壬	癸	甲	乙	丙	丁	戊	己	庚	辛
戊癸日	壬	癸	甲	乙	丙	丁	戊	己	庚	辛	壬	癸

問：次の日本標準時の時干支を求めよ。時差と均時差の修正をすること。

- (1) 2013年5月18日10時40分 東京 (2) 2013年8月5日17時10分 福岡
 (3) 2013年11月10日22時30分 札幌

解答

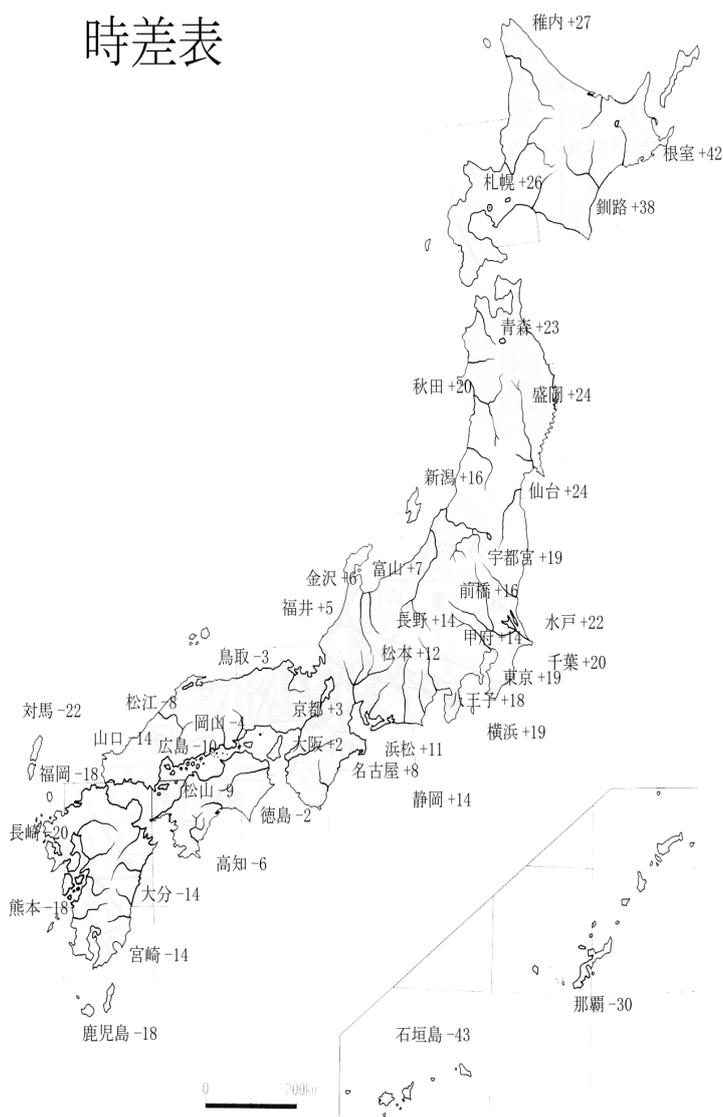
- (1) 日干支は甲申、東京時差+19、均時差+4、修正時間11:03、(1)より時支午、(2)より時干支庚午
 (2) 日干支は癸卯、福岡時差-18、均時差-6、修正時間16:46、(1)より時支申、(2)より時干支庚申
 (3) 日干支は庚辰、札幌時差+26、均時差+16、修正時間23:12、(1)より時支子、(2)より時干支戊子

(注：子刻に修正されたために、日干支は翌日の辛巳になる)

時差表

場所	時差	場所	時差
根室	+42	稚内	+27
釧路	+38	札幌	+26
青森	+23	盛岡	+24
秋田	+20	仙台	+24
新潟	+20	宇都宮	+19
前橋	+16	水戸	+22
千葉	+20	東京	+19
甲府	+14	長野	+14
横浜	+19	松本	+12
富山	+7	金沢	+6
福井	+5	浜松	+11
名古屋	+8	静岡	+14
京都	+3	大阪	+2
鳥取	-3	岡山	-4
松江	-8	広島	-10
山口	-14	徳島	-2
高知	-6	松山	-9
福岡	-18	大分	-14
宮崎	-14	長崎	-20
熊本	-18	対馬	-22
那覇	-30	石垣島	-42

時差表



均時差表

日	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
1	-3	-13	-12	-4	3	2	-4	-6	0	10	16	11
2	-3	-14	-12	-4	3	2	-4	-6	0	11	16	11
3	-4	-14	-12	-3	3	2	-4	-6	1	11	16	10
4	-4	-14	-12	-3	3	2	-4	-6	1	11	16	10
5	-5	-14	-12	-3	3	2	-5	-6	1	12	16	9
6	-5	-14	-11	-2	3	1	-5	-6	2	12	16	9
7	-6	-14	-11	-2	3	1	-5	-6	2	12	16	9
8	-6	-14	-11	-2	4	1	-5	-6	2	12	16	8
9	-7	-14	-11	-2	4	1	-5	-5	3	13	16	8
10	-7	-14	-10	-1	4	1	-5	-5	3	13	16	7
11	-8	-14	-10	-1	4	0	-5	-5	3	13	16	7
12	-8	-14	-10	-1	4	0	-6	-5	4	13	16	6
13	-8	-14	-10	0	4	0	-6	-5	4	14	16	6
14	-9	-14	-9	0	4	0	-6	-5	4	14	16	5
15	-9	-14	-9	0	4	0	-6	-4	5	14	15	5
16	-9	-14	-9	0	4	-1	-6	-4	5	14	15	4
17	-10	-14	-8	0	4	-1	-6	-4	5	15	15	4
18	-10	-14	-8	1	4	-1	-6	-4	6	15	15	3
19	-10	-14	-8	1	4	-1	-6	-4	6	15	15	3
20	-11	-14	-8	1	4	-1	-6	-3	7	15	14	2
21	-11	-14	-7	1	3	-2	-6	-3	7	15	14	2
22	-11	-14	-7	1	3	-2	-6	-3	7	16	14	1
23	-12	-13	-7	2	3	-2	-6	-3	8	16	14	1
24	-12	-13	-6	2	3	-2	-6	-2	8	16	13	0
25	-12	-13	-6	2	3	-3	-6	-2	8	16	13	0
26	-12	-13	-6	2	3	-3	-6	-2	9	16	13	-1
27	-13	-13	-5	2	3	-3	-6	-2	9	16	12	-1
28	-13	-13	-5	2	3	-3	-6	-1	9	16	12	-1
29	-13		-5	3	3	-3	-6	-1	10	16	12	-2
30	-13		-5	3	3	-4	-6	-1	10	16	11	-2
31	-13		-4		2		-6	0		16		-3

③将神を求める

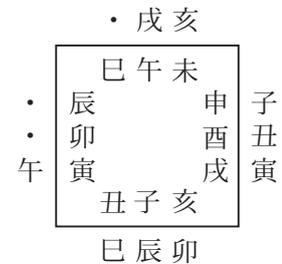
将神を求めるには占うときの月将をまず求める。月将は月支と支合する十二支であり、次の表のようになっている。たとえば、寅月の月将は亥。

月将表（月は新暦、始まりは各節入り）

月	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1
旧暦	正月	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二
月支	寅	卯	辰	巳	午	未	申	酉	戌	亥	子	丑
月将	亥	戌	酉	申	未	午	巳	辰	卯	寅	丑	子
名称	登明	河魁	從魁	傳送	小吉	勝光	太乙	天罡	太冲	功曹	大吉	神后

月将が決まれば、月将を時支に乗せ地分まで十二支の順通りに数える。地分に乗る十二支が将神となる。

たとえば、卯月の午時に地分を寅として占った場合。月将は戌なので、戌を午に乗せ地分寅まで数えると、右図のように将神は午になる。



④貴神を求める

最初に、次の表にある十二貴神の順番を覚えなくてはいけない。将神も貴神も名称は参考に記載したが、できたら覚えて欲しい。

十二貴神と順番

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
貴神	丑	巳	午	卯	辰	寅	戌	申	未	子	酉	亥
名称	貴人	騰蛇	朱雀	六合	勾陳	青龍	天空	白虎	太常	玄武	太陰	天后

次に、1番目の天乙貴人丑の始める位置を決める。これは占う日の日干と太陽が出ているかどうかで決まる。太陽が出ている昼を旦とか陽貴あるいは昼貴という、太陽が出ていない夜、雨、曇りのときを暮とか陰貴あるいは夜貴という。これには口訣があって次のようになる。順とは十二支順で逆とは反対廻りとなる。

甲戌庚の日は、旦は丑から順に巡り、暮は未から逆に巡り始める。

乙己の日は、旦は子から順に巡り、暮は申から逆に巡り始める。

丙丁の日は、旦は亥から順に巡り、暮は酉から逆に巡り始める。

辛の日は、旦は午から逆に巡り、暮は寅から順に巡り始める。

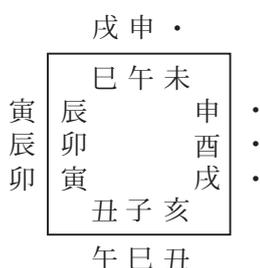
壬癸の日は、旦は巳から逆に巡り、暮は卯から順に巡り始める。

巡り始める最初の十二支に天乙貴人の丑を乗せて十二貴神の順番に地分まで数える。地分に乗る十二貴神が求める課の貴神となる。たとえば、晴れの丙日に地分を午として占った場合。亥がスタート位置になるので、天乙貴人の丑を亥に乗せ地分卯まで数えると、下図（1）のように貴神は申になる。

次の例として、暮の丙日に地分を子として占った場合は、下のように酉がスタートなので十二貴神の順に数えて、下図（2）のように貴神は子になる。

晴れているときの旦と暮の境は、原典には星が見えるか見えないかで決めるとある。

(1) 丙日陽貴・地分卯



(2) 丙日陰貴・地分寅



きちんと理解暗記できるまで、貴神を求める一覧表を使ってもよい。

日干昼夜別 十二貴神表

地分	子	丑	寅	卯	辰	巳	午	未	申	酉	戌	亥
甲戌庚陽貴	天后亥	貴人丑	騰蛇巳	朱雀午	六合卯	勾陳辰	青龍寅	天空戌	白虎申	太常未	玄武子	太陰酉
甲戌庚陰貴	白虎申	天空戌	青龍寅	勾陳辰	六合卯	朱雀午	騰蛇巳	貴人丑	天后亥	太陰酉	玄武子	太常未
乙己陽貴	貴人丑	騰蛇巳	朱雀午	六合卯	勾陳辰	青龍寅	天空戌	白虎申	太常未	玄武子	太陰酉	天后亥
乙己陰貴	太常未	白虎申	天空戌	青龍寅	勾陳辰	六合卯	朱雀午	騰蛇巳	貴人丑	天后亥	太陰酉	玄武子
丙丁陽貴	騰蛇巳	朱雀午	六合卯	勾陳辰	青龍寅	天空戌	白虎申	太常未	玄武子	太陰酉	天后亥	貴人丑
丙丁陰貴	玄武子	太常未	白虎申	天空戌	青龍寅	勾陳辰	六合卯	朱雀午	騰蛇巳	貴人丑	天后亥	太陰酉
壬癸陽貴	青龍寅	勾陳辰	六合卯	朱雀午	騰蛇巳	貴人丑	天后亥	太陰酉	玄武子	太常未	白虎申	天空戌
壬癸陰貴	玄武子	太陰酉	天后亥	貴人丑	騰蛇巳	朱雀午	六合卯	勾陳辰	青龍寅	天空戌	白虎申	太常未
辛陽貴	天空戌	青龍寅	勾陳辰	六合卯	朱雀午	騰蛇巳	貴人丑	天后亥	太陰酉	玄武子	太常未	白虎申
辛陰貴	太陰酉	天后亥	貴人丑	騰蛇巳	朱雀午	六合卯	勾陳辰	青龍寅	天空戌	白虎申	太常未	玄武子

⑤人元を求める

人元は、次の五子元遁表を用いて求める。

たとえば、丙日に地分が卯であれば人元は辛になり、癸日に地分が戌であれば人元は壬になる。

五子元遁表

各 位	子	丑	寅	卯	辰	巳	午	未	申	酉	戌	亥
甲己日	甲	乙	丙	丁	戊	己	庚	辛	壬	癸	甲	乙
乙庚日	丙	丁	戊	己	庚	辛	壬	癸	甲	乙	丙	丁
丙辛日	戊	己	庚	辛	壬	癸	甲	乙	丙	丁	戊	己
丁壬日	庚	辛	壬	癸	甲	乙	丙	丁	戊	己	庚	辛
戊癸日	壬	癸	甲	乙	丙	丁	戊	己	庚	辛	壬	癸

⑥神干と将干を求める

神干と将干も五子元遁表で求める。

実際に課を求めてみよう。

例題1 2013年5月31日10時30分 東京 晴れ 地分を丑として

例題2 2013年6月4日14時50分 東京 雨 地分を亥として

例題3 2013年7月13日23時00分 東京 夜 地分を卯として

解答1

②暦より日干支：丁酉、東京の時差+19、均時差+2で+21分の修正、10時51分が真太陽時、9時から11時までは巳刻、また丁日巳時は表より時干乙

時空：年癸巳、月丁巳、日丁酉、時乙巳 空亡辰巳水

③月建巳の月将は申、申を時支の巳に乗せて地分丑まで数える

申 酉 戌 亥 子 丑 寅 卯 辰・・・将神

巳 午 未 申 酉 戌 亥 子 丑

④丁日晴れは、貴人丑は亥から順行、右図のように地分丑まで数えると、貴神午

⑤五子元遁表より 丁日地分丑は人元辛

⑥⑤と同様に貴神午より神干は丙、将神辰より将干は甲

巳	午	未
辰		申
卯		酉
寅		戌
	丑	子 亥

午 巳 丑

癸巳	丁巳	丁酉	乙巳
			空亡辰巳水
人元	辛		
貴神	丙午		
将神	甲辰		
地分	丑		

解答2

②暦より日干支：辛丑、東京の時差 +19、均時差 +2 で +21 分の修正、15 時 11 分が真太陽時、15 時から 17 時まで申刻、また辛日申時は表より時干丙
時空：年癸巳、月丁巳、日辛丑、時丙申 空亡辰巳水

③月建巳の月将は申、申を時支の申に乗せて地分亥まで数える

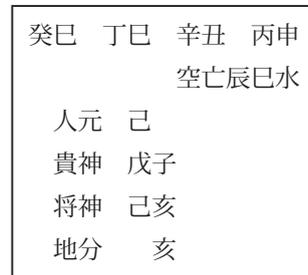
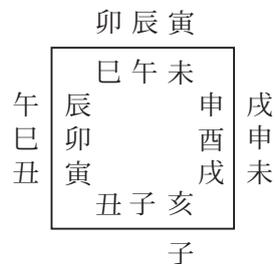
申 酉 戌 亥・・・将神

申 酉 戌 亥

④辛日雨は、貴人丑は寅から順行、右図のように地分亥まで数えると、貴神子

⑤五子元遁表より 辛日地分亥は人元己

⑥⑤と同様に貴神子より神干は戌、将神亥より将干は己



解答3

②暦より日干支：己卯、東京の時差 +19、均時差 -6 で +13 分の修正、23 時 13 分が真太陽時、23 時から 01 時まで子刻、また翌日になるので日干支が庚辰に変わり子時は表より時干丙

時空：年癸巳、月己未、日庚辰、時丙子 空亡申酉

③月建未の月将は午、午を時支の子に乗せて地分卯丑まで数える

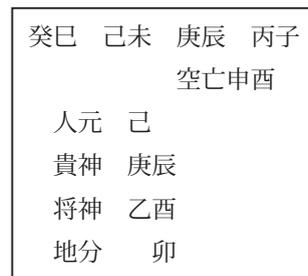
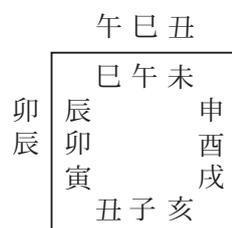
午 未 申 酉・・・将神

子 丑 寅 卯

④庚日夜は、貴人丑は未から逆行、右図のように地分卯まで数えると、貴神辰

⑤五子元遁表より 庚日地分卯は人元己

⑥⑤と同様に貴神辰より神干は庚、将神酉より将干は乙



【忌時】

忌日時は、占うと金口訣の的中率が下がると言われている日時をさす。

太歳または月建と同じ十二支の時刻

月	寅午戌	申子辰	巳酉丑	亥卯未
忌時	卯 5～7 時	酉 17～19 時	午 11～13 時	子 23 時から 1 時

日	甲乙	丙丁	戊己	庚辛	壬癸
忌時	酉 17～19 時	子 23 時から 1 時	卯 5～7 時	午 11～13 時	未 13～15 時

また、一般的に日時が天戦地冲になる時間も同様である。天戦は十干が剋になる関係をさすが、避ける十干は甲と庚、乙と辛、丙と壬、丁と癸である。したがって、次の表のようになる。

日	甲子	乙亥	丙戌	丁酉	庚寅	辛丑	壬子	癸亥
忌時	庚午	辛巳	壬辰	癸卯	甲申	乙未	丙午	丁巳

毎日一度は課を立てて、立課の速度を上げて欲しい。理論を覚えれば 1 分以内に立課できるようになるであろう。いつまでも表を見ては上達しない。また、表を見たりインターネットで課を求めたりする的中率も上がらない。課を正しく求めることが絶対ではないからである。

3節 用爻と旺相休囚死

【用爻】

用爻は判断の中心点であり、吉凶の要となる。人元を天、地分を地とし貴神と将神を人とする。用爻は貴神か将神のみに該当する。用爻は、四位の陰陽で決まり、四位を陰陽で分類すると、①四陽 ②三陽一陰 ③二陽二陰 ④一陽三陰 ⑤四陰 となる。人元と地分は常に陰陽は同じである。

①四陽のときは、用爻は貴神にする。外は強く内は弱いことになる。客は吉で主は凶、外に置いて協力が得られる。陽の極に達しているので、物事は逆の方向に動いていく。男性に関することから女性へ関することへと変わる。

②三陽一陰のときは、用爻は一陰となる貴神か将神にする。女性に関することであれば、遅ければ吉で急ぐと凶となる。動くと凶なので、禍が多く病気は長引く傾向がある。

③二陽二陰のときは、用爻は将神にする。将神が陽であれば陽的に判断し男性に関わることとし、陰であれば陰的に判断し女性に関することとする。ただ、男の子が生まれるか、女の子が生まれるかというときは、将神が陰だと男の子が生まれ、将神が陽だと女の子が生まれると判断する。

④一陽三陰のときは、用爻は一陽となる貴神か将神にする。陽的に判断し男性に関わることなら急げば吉で遅れると凶と判断する。

⑤四陰のときは、用爻は将神にする。静であれば吉で動くと凶。主は吉で客は凶、家にいることは吉になり、外出することは凶になる。女性に関することから男性に関することへと変わる。

貴神を官爻、将神を財爻と呼ぶ。人生の大きな問題は官か財に分けることができる。用爻が将神になる確率が高いということは、一般的に官の問題よりも財の問題のほうが多いということであろう。また、地分を副財爻とも呼ぶ。副財爻とは呼ぶが、現実的には不動産などを表す。用爻がどこにあっても、仕事のことは官爻を中心に、財のことは財爻を中心に判断する。仕事、財以外のことを占うときは用爻を中心とする。しかし、用爻が休囚死では用爻は実権を持っていないことになる。

貴神が用爻のとき貴神と将神が内で人元と地分が外になり、将神が用爻のとき将神と地分が内で人元と貴神が外になる。普通、内を家庭内、仕事場などとし、外を遠い親戚、取引先、知らない人、外出先などと考えればよい。

【四位の内外】

人元	○	外	
貴神	●●	内	用爻
将神	●●	内	
地分	○	外	

人元	○	外	
貴神	○○	外	
将神	●●	内	用爻
地分	●	内	

また、四位の基本的な意味も判断には重要な役割を果たす。右の四象所属表にまとめておく。特に、病気占では、人元を頭・貴神を胸・将神を腹・地分を足と捉える事は病気の患部を知る上で大切になる。

【四象所属表】

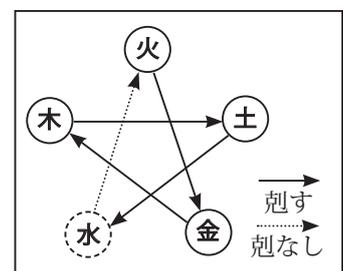
人元	天	祖父母	取引先	国家・役所	頭
貴神	人	父母	上司	仕事	胸
将神	人	自分	妻・親戚	財	腹
地分	地	子供	部下・弟子	不動産・家畜	足

【用爻の旺相休囚死】

旺相休囚死は四位の五行の相剋により決まる。剋されないものが旺となり、旺相は主動であり、休囚死は被動である。一般的な吉凶判断では、休囚死では自分が主体的に行動できないため吉にはならない。

旺相休囚死を五行の数で分類してみる。

① 四位に4種類の五行がある場合。例えば、四位に木火土金が揃っていたとする。右図のように水がないので火は剋されることがない。火が旺となる。火が旺なので火が生じる土が相となる。火が剋する金が死となる。火を生じる木が休と



なる。火は旺なので木が火を生じる必要がないため木を休と呼ぶ。

② 四位に3種類の五行がある場合。二つのパターンに分かれ、一つは連続でもう一つは一行が離れている場合である。

例えば、木火土と連続になる場合と木火金と金が離れている場合である。

木火土の場合は、金と水がないので金剋木と水剋火が起こらない。したがって、木と火が旺となる。この場合、木を旺とし火を相とする、土は死となる。

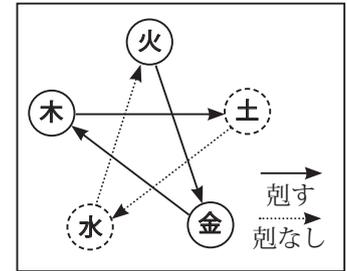
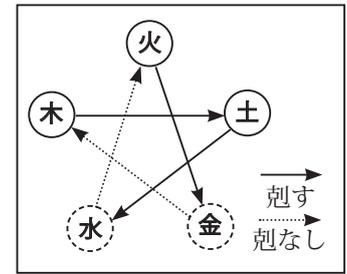
木火金の場合は、土と水がないので土剋水と水剋火が起こらない。したがって、火が旺である。火が旺なので金は死、木は休となる。

③ 四位に2種類の五行がある場合。二つのパターンに分かれ、一つは連続でもう一つは一行が離れている場合である。

例えば、木火と連続になる場合と木土と離れている場合である。木と火の場合は、木が旺で火が相となる。木と土の場合は、木が旺で土が死である。

ただし例外がある。例えば、3木と1金の場合である。本来、金剋木より金が旺で木が死となるが、金1個では木3個を剋せないという規則である。したがって、木が旺となり金が囚となる。金が木を剋しに行ったのであるが、木が強いために金のほうが木に囚われてしまう。

④ 四位に1種類の五行しかない場合。これはその五行を旺とする。



【用爻空亡】

用爻空亡であれば、相談内容にウソか空想の場合がある。用爻旺相空亡であれば、求めることは半分しか成功せず、休囚死空亡であれば、全く力がなく求めることはうまくいかず、予定や計画は失敗する。

病気占では、かかったばかりの病気は空亡になると治るが、長く患っている病気は空亡になると病状が悪くなる。

【用爻の旺相休囚死】

用爻が旺相であれば、求めることは成功し吉はますます吉になるが、凶事象はますます凶になる。休囚死であれば、求めることは成功しない。特に、死のときは旺爻からの影響をきちんと見ないといけない。用爻が旺相でなければ、旺爻を中心に判断しなければいけない。旺爻が実権を握っているからである。

【用爻が沖・剋・刑・害・破】

用爻旺相に関係なく、用爻が悪い関係になると求めることはすべて凶となる。

病気占では、かかったばかりの病気は沖になると治るが、長く患っている病気は沖になると病状が悪くなり危険となる。

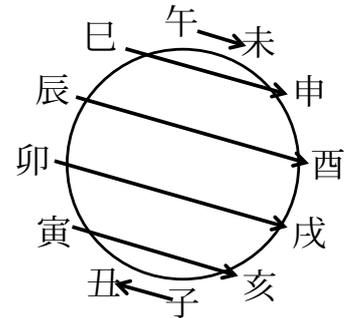
4節 干支の相互関係

【十二支の相互関係】

①支合（六合）

支合は矢印のように、主動が被動に向かって作用する。

- 子丑は化土、泥合。
- 寅亥は化木、破合。
- 卯戌は化火、滅合。
- 辰酉は化金、暗合。
- 巳申は化水、刑合。
- 午未は化土、明合。陰宅によし。



子丑と午未の合は親合、近合で血縁関係にあたる。その他は隔合で友達、親族、隣人、同僚などを表す。

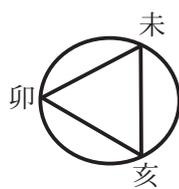
②三合

寅午戌三合は炎上の合、亥卯未三合は曲直の合、巳酉丑三合は従革の合、申子辰三合は潤下の合。正三角形を形成して安定を意味する。

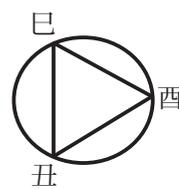
火局三合



木局三合



金局三合



水局三合



寅亥巳申を四生、午卯酉子を四旺、戌未丑辰を四庫（墓）という。また四旺は局身となるので、これが欠けると局は不成立。その他が欠けた場合は、その欠けた十二支を待つて局が成立する（虚一待用）。四庫が沖されると、破局となって労あって功なし。たとえば、寅午を半三合と呼び、戌を応期とするのが虚一待用。

③六冲

衝突、対立、敵対感情、転換の事象。

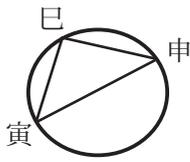
- 子午冲は、身の不安、精神不安定か病気、驚き、恐れ、憂いの感情、挙動不審、計画変更、男女の争い、出血の災い、文書、便り、盗賊、後輩の事など。子午の病気は血液に関する事、午は頭、心臓、血管を意味するので、脳血栓や脳溢血。
- 丑未冲は、恨みや仇、呪い、ののしり合い、口喧嘩、現実的でないことでの衝突、二心、婦人同士の揉め事、意図がずれているなど。
- 寅申冲は、行ったり来たり、計画変更、怪しげなこと、夫婦不和、路線変更、行事変更、職がある人は訴訟、強盗、中年男性の問題。
- 卯酉冲は、車禍、交通事故、訴訟、争い、流産、晩婚。卯を門とするので門改修、会社名変更、転居、手足の怪我、門窓破損、男女問題。
- 辰戌冲は、喧嘩争い、訴訟、損失のある衝突、下ものが逃走、裁判、善悪なし、宗教や学術的な争い、医学、占い、僧、神主のこと。中年が引き起こす訴訟。
- 巳亥冲は、怒り、いらだち、順に進めても逆になる、苦労あって益少なし、反復問題、私的で不明なこと、盗賊に会う、秘密、心の中に悪だくみを持った女性のこと、少女や子供のこと。



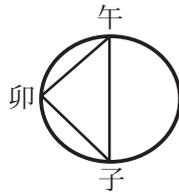
④三刑

三刑は、下図のように二等辺三角形となり不安定な状態を意味する。

寅巳申



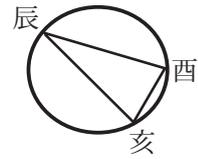
子卯午



丑未戌



辰酉亥



三刑は共通して悩み、恐れ、精神不安定、面倒くさいことを意味し、財運を占えば資金回収困難、商売運や仕事運は阻害あり。

- 寅巳申は、恩無き刑。火旺。背信の意味。亥を見ると解ける。
- 子卯午は、礼無き刑。木旺。雪の上にさらに霜が降るようなこと。酉を見ても解けず、四旺全は家を破る。
- 丑未戌は、勢いを恃む刑。土旺。自負心強し。辰を見ると解けるが、四季会殺になる。
- 辰酉戌は、自刑。金旺。憂い、疑い、猜疑心、心を開かず、悦びがない、病気を占えば悩み過ぎで自殺凶。

自刑は、辰と辰、酉と酉、亥と亥でも同じ意味を持つ。

注：古典には子卯の刑、辰午酉戌の自刑と記載されているが、三刑は三支の関係なので正しく修正した。

⑤六害

害は、妨害、労あって功なし、不和、抑圧、分離を意味する。

- 子未は、勢いを恃む害。暗闇での妨害、盗賊による害。
- 丑午は、下の者が上の者に逆らう害。財運や仕事運で妨害にあう。捏造の害。
- 寅巳は、自慢することで争いになる害。文書の制限、告発、苦情、訴えの害。
- 卯辰は、下の者が上の者に逆らう害。恨みや仇のための妨害。
- 酉戌は、呪詛、怨み、呪いの害。恨みのために妨害、あくどい、悪い風評による害。
- 申亥は、才能を嫉妬するために競争する害。道路であう害。遠くから来る害。



⑥四絶

言い争い、斬殺、断絶、絶交を意味する。

- 寅酉は、金絶。文書や道路での禍。物事は成就しがたい。無駄骨を折る。
- 卯申は、木絶。交通事故や車を傷つけられる。路上で強盗にあう。
- 午亥は、水絶。言い争いや訴訟、文字による問題。
- 子巳は、火絶。男女問題、破綻。



【十干の相互関係】

①干合

- 甲己干合は化土。中正の合、恩合。
- 乙庚干合は化金。仁義の合。
- 丙辛干合は化水。貴合、正合、明合。
- 丁壬干合は化木。淫合。
- 戊癸干合は化火。無情の合。

干合は甲乙丙丁戊が主動で己庚辛壬癸が被動となる。主動が動いて被動を合しに行く。

②三奇

- 甲戌庚の天三奇。
- 乙丙丁の地三奇。
- 壬癸辛の人三奇

5節 基本となる十干と十二支の意味

【米老師による十二支の隠れた意味】

子：代表は泥棒、軍人、少年、流動性および技術性の職業、機密事案、文字、鍵、見えないもの。人は機敏、謀を内に秘めている、四肢、狡猾、流れに乗って流れて行く、淫乱を好む

丑：学識、官人、丑女、恨みを持つ女性、怨み仇呪い、公の文書、金融および金融関係の職業、出納、会計。忠厚、誠実、性格は偏強、愛を怨みで返す。証明書、手形。休囚死は老婆。

寅：偉い官人、文書情報、金銭、高価なもの。人は高潔で学識がある、ニューモード、科学技術品、通信設備、老人。

卯：車船、飛行機などの交通手段、空亡に逢うと飛行機に乗っているかネットや電話、書簡、売買交易、連絡方法、運転手、官吏、少女、四肢、

辰：医学巫女ト相、宗教などに関係する人、法律関係の人から派生すること、偏強、争いを好む、怒りやすい、眼が小さく声大きい、姿凶、訴訟、中年の人、威厳のある象、だみ声、辰旺沖に逢うと愚か者、道理がわからない、良識がない

巳：文書情報、驚き恐れる、戯言、疑い深い、軽率、淫乱、口達者、横暴、偏強、愛からうっとうしさが生じる、勾策、女性、けちくさい、自我、ローソクの光

午：文書、文章、四肢、災い、禍、文芸、ニュース、ニュースに関すること、人は負けず嫌いで利益や官禄を好む、書籍、栄誉、賞状、文筆、絵画、少男、文化、驚き恐れ、災禍、けちくさい、虚栄を好む、旺であると凶暴、午が午を見ると精神抑圧

未：食事、酒食宴会、酒がいける、皮膚、毒薬、副作用のある薬、策士、能弁、料理上手、美食家、手芸が上手な人、利き酒師、売買、飲食関係および食品包装関係の人、未が未を見ると内心びくびくして不安

申：伝送の神、送迎の交通機関、軍隊警察、政治家、法律関係の人、貴客、老翁、駆け巡り苦勞する職業、流動性が大きい、人は凶悪、道路で驚き恐れ、眼が黄色で首が短い、武術武器銃などを好む、

酉：皮膚、四肢、装飾品、化粧品、鏡、金銀ネックレス、美容院、金融業、庭園、理髪店、金属食器、陰私暗昧（卯酉の沖は夫婦別離、辰酉合は主人下のものゝ淫乱、隠し事）。土に逢うと水を見ると（水の制があるとき）女性は落ち着いて物静かで優雅、水が旺で制がない（水があつて土がない）と軽はずみ、放蕩、淫乱、娼妓。旺で水に逢うと金水相生で容姿端麗美人。人は隠し事をする、疑い深い、計算高い、思慮深い。私ごと、陰私暗昧で気持ちが定まらない、（官鬼と同じ）。沖に逢うと夫婦離婚、合に逢うと女性淫乱。

戌：医学、巫女ト相、一人身の人、宗教、信徒、宗教用品。悪人、黒社会、法律執行者（虚論で不実）。外面が良いが内面は悪い人、中年、軍人警察、中医学（旺だと家の中に宗教を信仰する人がいる）。

亥：恩賞、贈呈、気持ちは善良、旺で制がないと軽薄、空想、暗昧不明の気持ち、良識のない人、幻想主義者、娼妓、本分を守らない人、発明家。場所ではトイレ、歌舞伎、異性の地、風呂、プール、暗昧な地（逢引の場所、ラブホテル）。女性は善良、合に逢うと結婚のために努力する、暗疾の病気（人に言えない病気）、勾索、妓女。亥が旺であれば文学家、書道家に向いている、

土の分類

辰：硬い石、硬い土、玉石、ダイヤモンド 戌：灰土、マグマ
 丑：湿土、泥土、農作に適した土 未：乾燥した土、砂地、のうさく物には適さない

【十干生剋による判断】

この十干は人元を指している。人元は外、上、客であり人元からの生剋でどのような事象が起こるかを判断する。生剋片方の事象しか記載はないが、剋の事象は生の事象の反対と考えればよい。ただし、人元旺相でないと作用しないのは当然であろう。

- 甲：貴神、地分を生じると、喜び事、祝い事、結婚、昇給、収益増（神殺六甲と同事象）
- 乙：生の関係であると、財や高級品・珍品に関すること、親しいやりとりや連絡
- 丙：貴神、地分を剋すると、家庭に問題あり不安定、文字・文書による損失
- 丁：貴神、地分を剋すると、驚き恐れ、災いの憂い、悲しい事態
- 戊：貴神、地分を剋すると、不動産や墓、跡継ぎなど訴訟、甚だしい争い
- 己：貴神、地分を生じると、酒食の悦び、不動産増益、結婚などの祝い事
- 庚：貴神、地分を剋すると、家畜死亡、不動産の損失、交通事故
- 辛：貴神、地分を剋すると、外に喪、凶事、驚くだけのこと
- 壬：貴神、将神を剋すると、祭礼が行われぬ、災い患いの発生
- 癸：貴神、地分を剋すると、ペット、家庭に驚きや怪しいことが起こる

【十二地支生剋による判断】

この十二支は地分を指している。将神から剋されるか生じられるかがによって判断してよい。

- 子：剋されなければ、財帛流用時にすでに得る
- 丑：剋されなければ、財帛田産すべて富あり
- 寅：剋されなければ、官吏、文書、財帛は吉
- 卯：剋されなければ、出入り、飲食、文書は吉
- 辰：剋されなければ、時に子供についての争いが起こる
- 巳：剋されなければ、婦女過去のことで邪念を生じる
- 午：剋を受けると、出血、驚き恐れを見る
- 未：生合となると、婦女酒食異性を慕う
- 申：剋されなければ、親友遠来するが道路において凶
- 酉：生合となると、出入り、酒を好む
- 戌：剋を受けると、子供に驚き恐れあり
- 亥：剋を受けると、家の中に病人、出産は危険

6節 五行の関係

【二木爻を為すは求めること得難し】

木の性質は素直で調和を大切に。強ければ慈悲深く優しい、正直で素朴、容姿は背が高く美しい。弱ければ言動が定まらず偏屈で嫉妬深い、ケチで痩せている。

四位に木が2つあると、求める望みは良くない結果となるか成功するのは難しい。なぜなら、木は樹であるから風が吹けば枝葉が動く、自分の考えが定まらずに他人の意見に迷う。また、木が繁茂すれば林となって交錯し主体がなくなる。

人元と貴神に木が2つあると、そのことは開始するときに困難がある。

貴神と将神に木が2つあると、そのことは中間時に困難がある。

将神と地分に木が2つあると、そのことは終わりに困難がある。

隔たって木が2つあると、全体的に全般に困難がある。

しかし、水と土があると吉になることがある。たとえば、右のような課である。

貴神亥水が下降して二木を生じる。将神卯木は門戸で財が旺じ、寅は財帛の意味をもつ。二木が水に生じられ喜び事は七里の場所やその金額に応じる。さらに、将神卯木と地分寅木が人元戊土を尅して、自ら動いて自分の手で財を得る。

一般的に、内が旺で外を尅すれば、求めることは必ず得られる。ただし、自分が動かなくてはいけない。内が旺で外を生じれば、財は外に向かって流れる。財を持って人に頼みに行き、その財によって名を得る。外が旺で内を尅すれば、財を損ない外で財物の争いが起こる。外が旺で内を生じれば、自ら求めなくても財を得られる。目上の人物の助けがあり名と利の両方を得られる。

癸未	辛酉	癸卯	丙辰
			空亡辰巳水
人元	甲	旺	
貴神	癸亥	休	
将神	乙卯	旺	用爻
地分	寅	旺	

人元	戊	死	
貴神	丁亥	休	
将神	己卯	旺	用爻
地分	寅	旺	

【二土比和は遅きを見る】

土は万物を生じる母である。重く厚くどっしりしている。人であればその性格は堅強で固執。丸顔で黄色味を帯びて太っている。強すぎるとのろまで頑固、弱いと道理がわからず信頼性がなく残酷、背が低く痩せている。土は移動するのが遅く変更するのは簡単ではない。したがって、四位内に土が2つあると、主客とも事は遅きとする。成功したとしても時間がかかる。

一般的に、二土があると事は遅く財を求めれば争いが起こる。しかし、水があると吉になることがあり、さらに木があれば喜び事が大きくなる。たとえば、右のような課である。

貴神の寅木は財帛の意味がある。貴神寅木尅将神未土、神干庚金尅将干乙木はいずれも後ほど講義する賊動といい、財を損なう。しかし、乙庚は干合し化金となり財を得る。また、未土は木庫となり寅木は未土に入墓するので寅木は未土を尅さなくなり財を得る。また、将神未土と地分辰土は人元壬水を尅し、自分の手で外に向かって財を求め得ることができ吉である。

もし、この占断が夏であれば四位に土と水と木があり、夏は火を強くし木は豊かに茂り財運が強くなる。そして神干庚のように金があれば、金は木を尅し樹は木材となり確実に財を得ることができる。二土があるので遅くはなるが財運大吉の課である。

人元	壬	休	
貴神	庚寅	旺	
将神	乙未	死	用爻
地分	辰	死	

【二金に刑尅があるとすべて不順】

金は剛健で折れても曲がったりはしない激しい性質である。是非に対する言い争いが多く、勇敢で権力を求める。強ければ利欲よりも義を重んじ、決断力がある。強すぎると無謀で貪欲、人を騙す。弱ければ挫折が多く冷

酷決断力に欠ける。

四位に金が2つあると凶で不順。たとえば、人元金・貴神金・将神木は妻を傷つける。また、将神と地分が金で貴神木だと財動であるが官を傷つけ破財かつ訴訟の争い。将神と貴神が金で人元木であれば官動であるが仕事に関して災厄の発生。ただ、裁判などは自分に有利で吉。

一般的に、金が2つあると不順で凶であるが、水と土があると喜び事がある。二金が水を挟むと子孫ができる喜び、上下に水土があると財産が増えるか家を新築購入する。

たとえば右のような課である。

地分未土が将神と貴神の金を生じ、金は人元水を生じる。下から順に上を生じるので、外に出て商売をすると財を得られる。

人元	癸	死	
貴神	甲申	相	用爻
将神	乙酉	相	
地分	未	相	

【二火は災いとし傷を残す】

火は情なし残忍で毒を狼し傷を残す。悪にあっても怖れず善にあっても欺く。言動は主張あって果断。夫婦はしっくりとしない。強ければ謙虚で礼儀正しく威厳があって気高い、背が高く頭や指が尖っている。弱ければ嘘つきで嫉妬深い、痩せていて背が低い。

二火二水は大凶で吉になることがない。水が上にあれば失財、下にあれば家庭不和。もし二水に挟まれたら女性には産厄。二水上にあれば離婚。

一般に、二火は凶となるが、土があれば吉になることがある。右のような課である。貴神卯木が人元を尅して官動になり、将神を生じて吉。将神と地分は財を表し、火相となって大吉。木旺が火を生じて財が豊かであり仕事運もよい。貴神、将神、地分が旺相で家業が繁栄しているか、家長は金持ちまたは財によって官職を得る。東方に財の謀を求めて大吉。

人元	戊	死	
貴神	乙卯	旺	用爻
将神	戊午	相	
地分	午	相	

人元に戊土己土があり、火から生じられると貧乏から富豪になる。水がなければ富は一時的で、水があれば木を生じて富が長く続く。卯木は交易や商売の意味があり、木旺ならば財を得られる。しかし、金に遇えば財を失うか、交通事故にあうもしくは家庭に不和が生じる。火旺であると財は外に流れるが、土があれば火は燃えて土となり、形あるものとなって金持ちになる。

【二水皆大吉の象と為す】

水は万物を育てる、しかし形があっても体がない、他人に従い易く自分の意見を持たない。聡明で善良な性質を持つ。強ければ深遠で知恵があり学識もある。言葉が流暢で穏やか。強すぎれば淫乱で貪欲、放蕩。弱いと度胸がなく、気が変わりやすい、臆病で無謀。

四位に二水があると大吉というが、比和か間隔があるか、冲刑の状態、殺を受けているか等を明らかにしなくてはいけない。たとえば、将神と地分に二水があっても人元と貴神に二土があれば必ず家族は二人傷つき、財を破り、盗賊の謀にあう。また、二火があれば裁判ごとや別離の憂い。もし、二木が上にあれば寅は財帛、卯は交易、結婚、和会の喜び。もし火が木の上であれば女性は嫁ぐ、家相は南面が張り出している。

二火が上にあり二水が下にあると肺病。二水が上で二火が下にあると難産死産、妻は夫を嫌い、火による驚きが続く。

人元と貴神に二水があれば、事の始めに吉か外で水難にあう。貴神と将神に二水があれば、中間は吉か淫蕩、悪だくみ、盗難、損失にあう。将神と地分に二水があれば、事の終わりは吉かと家土地の争い、未亡人、孤児、漂流にあう。